

荒木源次郎の葬式に、中荒井のおぶんという人が

あらきげんじよはしらはたたてて

えんまだいおの世話になる

妻おきんは棺の前で

げんさおまえとこの世のわかれ

らくにゆかんせ極楽へ

と歌ったという。歌で師や友・夫を見送るうるわしい情景がみえるようである。民謡・俗謡とはもともと、このような、身近かな郷土感のあったものであろう。

3、かんしょ踊 会津磐梯山という名で普及されている会津盆踊歌が、いつのまに、このような形で有名になったかをふりかえっておく必要があるように思う。

もともとは甚句という名で呼ばれていた。高田甚句などが代表的で、正調会津磐梯山などの名で、高田の盆踊歌や、もっと古くからの個性をもつ本郷甚句などを大切に取扱うべきものかとさえ思っている。或は北会津村辺の古老に、その古い流れをもっている人があるのではなからうか。あれば、この際せめて録音なりとおきたいと思ったが、今回はそこまで手が廻らなかつたのは残念である。

これを村々の人は、高田のかんしょ踊などと呼んでいたのを記憶している人は、まだある。気違い踊りという意味で、明治初年に越後五カ浜より若松へ来ていた油締めあぶらぢめの若い衆が、阿弥陀寺境内で踊って、熱狂的歓迎を受けてから、この名が出来たなどという人もある。しかし言葉の内容、節廻しから、元歌は玄如節にあったのではないかと思われる。しかも、会津でも甚句の形で、各地独特の音調があったように覚えている。決して近年に発